

科学トレ NEWS LETTER

東京オリンピックを終えて ～そして次につなげるために～

2021 vol. 2

「東京オリンピックに参加して」

金沢大学整形外科 中瀬順介

私は、日本ウエイトリフティング協会 スポーツ医科学委員 オリンピック強化スタッフを拝命していることもあり、東京オリンピックには、ウエイトリフティング競技の選手用医師として参加しました。男女合わせて132名の選手が参加し、現場でどのようなケガや障害が発生し、どのようなケアを行ったかを聖マリアンナ医科大学の足利光平先生がすぐに英文にして報告しています(写真1)。

Sport Sciences for Health
<https://doi.org/10.1007/s11332-021-00865-1>

ORIGINAL ARTICLE



Medical care provision at the venue of the weightlifting event of the Tokyo 2020 Olympic Games

Kohei Ashikaga¹ · Kihei Yoneyama² · Kuniaki Hirayama³ · Tatsuhiro Suzuki⁴ · Ryota Muroi¹ · Rumiko Inoue⁵ · Yuki Ishibashi² · Junsuke Nakase⁶ · Hideaki Takeda⁷ · Hiroto Fujiya¹

Received: 24 August 2021 / Accepted: 18 October 2021

(写真1) 注目は8月24日に初稿を提出していることです。

その結果、80%程度の選手はテーピングやアイシングを希望してメディカルブースを訪れていました。また、試合会場での受診は、軽度の意識障害と膝関節痛が2例と最多でした。出血の処置は1例で、今大会中は脱臼や骨折など大きな外傷は幸い発生しませんでした。これも日頃の鍛錬の賜物かもしれないと感じましたが、練習場で選手を見ていると練習のための準備に時間をかけていたことも印象に残っています。日々の積み重ねが本番で生きてきて、記録につながると感じた一方で、外国人選手はリラックスしているときと集中しているときがはっきりわかり、オンとオフの切り替えをしっかりとしているとも感じました。日本人選手は貴真面目過ぎて気持ちの切り替えが不得意なところかもしれません。

コロナ禍ということで、選手のみならず我々メディカルも大変な緊張感をもって職務に当たりました(写真2)。

無観客で残念でしたが、施設内での新型コロナウイルス感染者の発生がなく無事競技日程を終えたことは良かったと思いますし、私自身良い思い出となっています。今後はこの経験をチーム石川に還元したいと思います。



(写真2) 試合会場ではN-95マスクに加えてフェースガードも必須でした。